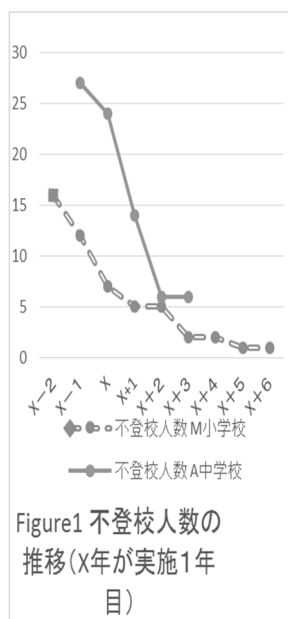


不登校を激減させた方法 6

—タッチ登校によるクラス完全復帰率98%—

工藤 弘 (安曇野市立三郷小学校)

キーワード：不登校，自己効力感



工藤・小林 (2010) から工藤 (2014, 2015, 2016) で、不登校の激減の方法が実証された (fig.1)。

目的と仮説

不登校児童生徒数が減るだけでなく、この方法での不登校を脱した多くの児童が、クラスに戻って普通に登校し、一日過ごしているのではないかと考えた。

また、例年のポスター発表では、支援会議における一部の効果を検討し発表してきたため、この発表で全体の方法も簡単に紹介する。

方 法

小学校5年間(H28,12月現在)で218支援会議中、106人対象、6人不登校(うち3人が要求過多)。この方法を行った103人について、クラスへの完全復帰をはたした人数はどのくらいか？

結 果

この方法を行った103人のうち101人が、1年以内にクラス完全復帰(98%)($p<.01$)を果たした。

考 察

不登校を激減させた方法実施のポイントは、以下のような内容になる。

「不登校を激減させた方法」の紹介

1 学校内の体制づくり

不登校コーディネーター(生徒指導主任)を中心に、先生方が共通基盤で行動する「職員行動ルール」と次の4つの体制づくりが最低条件となる。

①相談室・SC体制②タッチ登校を利用したスモールステップ③ルールのある学級学校集団④複数支援体制と激減法によるコーディネート(工藤,2014)

2 「たったポイントカードの利用」

不登校状態の子どもに無理のない支援になる理由として、このカードを利用し、「できる」という自信が先行していることがわかった。例「何時間学校にいられるか？」など(工藤,2016)。

3 「タッチ登校」を利用したスモールステップ

登校しぶりの子どもが、支援会議で「このくらい(の時間)は(登校)できる」という登校のハードルよりもさらに確実な低いハードルで、登校の内容を約束し、保護者とともに出来た事などを喜びながら、ともに成長を喜んでいく方法を戦略的約束タッチ登校という(工藤,2016)。

参 考 文 献

工藤弘 2016. 不登校を激減させた方法(5)～初期対応の効果の検証と「たったポイントカード」の利用, 第58回日本教育心理学会総会論文集, p383

工藤弘 2015. 不登校を激減させた方法(4)～自己効力感教育法を利用したカウンセリングとコーディネートの実証.第57回日本教育心理学会論文集 56, p 121

工藤弘 2014. 不登校を激減させた方法～中学校での激減と、小学校での激減の方法の共通性から.第56回日本教育心理学会論文集 55, p 854

工藤弘・小林武 2010. 不登校を激減させた方法～尺度の作成と小学校と中学校の連携による中一ギャップの予防(その1).第52回日本教育心理学会論文集, p 532

謝 辞

本研究に協力していただいた皆様に感謝申し上げます。